様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８０６４６

研究課題名（和文）日本人高校生によるいじめの原因調査

研究課題名（英文）The Effectiveness of Sociological Theories of Deviance in Explaining Bullying in Japan

研究代表者
小林　恵美子（Kobayashi, Emiko）

金沢大学・国際基幹教育院・教授

研究者番号：６０３１９２４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：今日の犯罪社会学を代表する４つの逸脱理論それぞれが措定する原因機制が、日本人未成年者のいじめに対して及ぼす効果を検証し、相対的な有効性について、以下のことが明らかとなった：（１）社会的絆理論、セルフ・コントロール理論、社会的学習理論、緊張理論のそれぞれが、程度の差こそあれ、日本人高校生の身体的・精神的いじめの原因機制として機能していること。（２）社会学習理論が措定する、非行的な仲間との接触による促進メカニズムが、日本人高校生のいじめを説明する上で特に有効であること。

研究成果の概要（英文）：The present research introduces evidence for the applicability of four common theories of deviance that have been developed in and tested primarily in the United States to account for bullying among Japanese teenagers: social control, strain, differential association/social learning, and self-control. An analysis of survey data from underage college students reveals that the causal relationships posited by all four theories are more or less evident among the respondents in Japan. A more detailed analysis leads to the conclusion that, of the four theories, differential association/social learning variables have the strongest main and net effects on self-reported physical and mental abuse among the Japanese teenagers. The findings suggest the cross-cultural applicability of the four theories of deviance that have dominated the discipline in the U.S. and highlight the effectiveness of differential association/social learning theory in explaining physical and mental bullying in Japan.

研究分野：犯罪社会学

キーワード：いじめ　社会的絆理論　社会的学習理論　緊張理論　セルフ・コントロール理論

1. 研究開始当初の背景

今日の犯罪社会学を代表する逸脱理論は、（１）Travis Hirschi の社会的絆理論、（２）Ronald Akers の社会的学習理論、（３）Robert Agnew の緊張理論、（４）Michael Gottfredson & Travis Hirschi のセルフ・コントロール理論である（Akers, Sellers, and Jennings 2016）。Tittle and Paternoster（2000）の分類によれば、社会的絆理論と社会的学習理論は、個人には内在しない外的要因を逸脱行為の主因と見なし、前者は、親への愛着や規範観念など、社会との絆が逸脱行為を抑制すると説き、後者は、逸脱行為に対する正の強化や負の強化など、非行的な仲間との接触が逸脱行為を促進すると説いている。一方、緊張理論とセルフ・コントロール理論は、個人に内在する内的要因を逸脱行為の主因と見なし、前者は、社会で奨励されている目標の達成願望と実現可能性の乖離から生じるストレスが逸脱行為を促進すると説き、後者は、低衝動性や低危険探究心など、強い自制心が逸脱行為を抑制すると説いている。

犯罪社会学をリードする米国を中心に、上記４つの逸脱理論が措定する原因機制の実証研究と追試研究は盛んに行われている。中でも、社会的学習理論が措定する、非行的仲間との接触が逸脱行為を促進するという因果関係は、粗暴犯や窃盗犯などの罪種についても適応されることは、数多く実証されている（Akers and Sellers 2013）。その一方で、日本人を調査対象者とした実証研究は数少ない。４つの理論の主要概念を定義に忠実に操作化していないため、犯罪やその他逸脱行為に対して及ぼす効果については、まだ十分明らかにされていない。したがって、米国で開発された 4 理論の文化を超えた一般化可能性については、課題として残されたままである。

以上より、本研究では、米国を中心に多様な罪種を説明し得ることが実証されてきた社会的絆理論、社会的学習理論、緊張理論、セルフ・コントロール理論が措定する４つの異なる原因機制が、文化的に大きく異なる日本の高校生のいじめに適応し得るかどうかを検証する。特に、犯罪社会学を代表する４つの逸脱理論といじめとの関連を明らかにすることは、理論的にも、実践的にも重要な検討課題である。いじめは、あらゆる集団に存在し、さまざまな不適応症状や心の傷を引き起こし、さらには不登校や引きこもり、自殺といった事態を招き得る深刻な社会問題である。また、学生時代に社会的逸脱行為をしていた者は、社会人になった後も多様な逸脱行為をする傾向が強いことを踏まえれば（Hirschi and Gottfredson 1994）、未成年者のいじめの原因解明は重要な課題であると考え、本研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、犯罪社会学の観点から、日本人高校生によるいじめの発生メカニズムを検証することである。今日の犯罪社会学をリードする米国においても、いじめに対する４つの逸脱理論の分析的妥当性は十分明らかにされておらず、解明を必要とする課題である。

具体的には、理論が提唱する４つのメカニズムがいじめに対して及ぼす効果を、実証的に解明する。

（１）社会的絆理論が措定する、社会との絆によるいじめ抑制メカニズム

（２）社会的学習理論が措定する、非行的な仲間との接触によるいじめ促進メカニズム

（３）緊張理論が措定する、ストレスによるいじめ促進メカニズム

（４）セルフ・コントロール理論が措定する、自制心によるいじめ抑制メカニズム

3. 研究の方法

初年度は、社会的絆理論が措定する、社会との絆による抑制メカニズムの実証的妥当性を検討した。実証は、大学新１年生を対象に実施した回顧型 Web アンケート調査のデータを用いて行った。従属変数となる「いじめ」は、高校時代に同級生や友人などに苦痛を与える目的で、身体的または心理的攻撃を継続的に加えた頻度を用いた。独立変数となる「社

会との絆」の 4 つの要素は、定義に忠実に操作化した。多くの先行研究で看過されてきた「親への愛着」の３つの側面である「親の監督状況」「親との同一化」「親との親密なコミュニケーション」についても整理し、変数操作した。実証的妥当性は、相関分析と重回帰分析を用いて評価した。重回帰分析を行う際には、逸脱行為との関連性が指摘される、調査対象者の性別や年令、家庭環境、親の学歴などを統制変数として加えた。

２年目は、社会的学習理論が措定する、非行的な仲間との接触による促進メカニズムの実証的妥当性を検討するため、「仲間の逸脱行為」や「仲間の逸脱行為に対する姿勢」などを、定義に即して操作化した。社会的学習理論が指定する「非行的な仲間との接触」には数多くの要素があるので、先行研究を基に、促進効果を及ぼすと予想される要素を選定し、変数操作した。

３年目は、以下の 3 点を行った。第一に、相関分析と重回帰分析を併用し、社会的学習理論が措定する促進メカニズムの実証的妥当性を検討した。第二に、緊張理論が措定する促進メカニズムとセルフ・コントロール理論が措定する抑制メカニズムの実証的妥当性を検討した。実証に際しては、緊張理論の主要概念である「3 種類の乖離から生じるストレス」と「ストレスフルな出来事への遭遇」を、定義に忠実に操作化した。セルフ・コントロール理論については、低衝動性、低危険探究心、低自己中心性など、理論の主要概念である「自制心」の６つの構成要素や「効果的なしつけ」の３つの側面についても整理し、定義に即して変数操作した。最後に、相関分析と重回帰分析を用いて、４つの逸脱理論が措定する原因機制の有効性を比較検討した。

4. 研究成果

本研究では、米国で開発された 4 つの逸脱理論が措定する原因規制が、限定的かつ程度の差こそあれ、日本人高校生のいじめに適応し得ることが明らかになった。具体的な成果は、以下のとおりである。

第一に、社会的絆理論が措定する抑制メカニズムについては、親への愛着が強いほど、そして、規範観念が強いほど、日本人高校生は交友関係のある相手に苦痛を与える目的で、身体的または心理的攻撃を継続的に加えることを自重する傾向が強いことが示された。この結果は、社会的絆理論が措定する抑制メカニズムの妥当性を支持するものであり、特に、親への愛着が抑止要因として作用しているという結果は、これまで看過されてきた 3 つの側面、つまり、「親の監督状況」、「親への同一化」、「親との親密なコミュニケーション」の抑止効果が実証されたという点で注目に値する。

第二に、社会的学習理論が措定する促進メカニズについては、いじめをする仲間が多いほど、そして、仲間がいじめに対して肯定的な態度を持っているほど、日本人高校生は同級生や友人に、身体的または心理的攻撃を継続的に加える傾向が強いことが示された。この結果は、社会的学習理論が措定する促進メカニズムの妥当性を支持するものである。

第三に、緊張理論が措定する促進メカニズムについては、希望する職に就く、将来役に立つ技能や資格を取得するなど、社会で奨励されている目標の達成レベルが達成見込みを下回るほど、そして、友人の死や両親の離婚など、日常生活においてストレスを伴う出来事に遭遇するほど、日本人高校生は身体的または心理的攻撃を交友関係のある相手に継続的に加える傾向が強いことが示された。この結果は、緊張理論が措定する促進メカニズムの妥当性を支持するものである。さらには、先行研究において定義に即して変数操作されることが稀有であった、社会的に価値ある目標の達成阻害に起因するストレスが、部分的ではあれ、促進要因としていじめに作用していることが実証されたという点において、注目に値する。

第四に、セルフ・コントロール理論が措定する抑制メカニズムについては、子供の行動監視、逸脱行為の認識、逸脱行為の処罰という 3 つの側面から成る効果的なしつけが徹底

されているほど、自制心が育成されること。そして、自制心が強いほど、日本人高校生は交友関係のある相手に身体的または心理的攻撃を継続的に加えることを自重する傾向が強いことが示された。この結果は、セルフ・コントロール理論が提唱する、家庭での効果的なしつけが自制心を育成する上で肝心であり、そして、自制心が逸脱行為を抑制するという因果関係が実証されたという点において、注目に値する。

最後に、上記４つの逸脱理論の中では、社会的学習理論が措定する促進メカニズムが、日本人高校生のいじめを説明する上で一番有効であることが示された。この結果は、先行研究結果と整合するとともに、窃盗犯や知能犯以外の罪種についても、非行仲間との接触が有効な促進要因として作用することを示唆している。さらには、米国で開発された４つの逸脱理論のうち、文化を超えた一般化可能性という論点においては、社会的学習理論が一番高いことを示唆している。

5．主な発表論文等

【学会発表】（計２件）

① Kobayashi, Emiko. “Bullying among Japanese High School Students: Applying Social Bond Theory.” Presented at the Annual Conference of the European Society of Criminology. September 3, 2015. Porto, Portugal.

② Kobayashi, Emiko. “Self-Control, Independent-Interdependent Self-Concepts, and Bullying: A Comparative Study of Japanese Male and Female Adolescents.” Presented at the Annual Meeting of the American Society of Criminology. November 18, 2016. New Orleans, LA.

6．研究代表者

小林　恵美子(EMIKO KOBAYASHI)
金沢大学・国際基幹教育院・教授
研究者番号：60319241

研究分担者　なし
連携研究者　なし